

M. エンデの『はてしない物語』

—— その同毒療法効果と振動医学の影響について ——

梅 内 幸 信

1. ファンタジー文学の隆盛

『はてしない物語』は、1979年秋に出版されるやいなや、空前のベストセラーとなり、「ドイツ語の本で戦後最大の成功を収めた」と言われる。¹ 実際、この「童話風長編物語」²は、エンデ文学の中で最も人口に膾炙した作品であると言える。エンデ自身が、『はてしない物語』を書くのは、命懸けでありました。この物語は、私を危うく精神病院に送りこむところでした」と述べている。³

エンデは、『はてしない物語』を書くに当たって、「E. T. A. ホフマンの『黄金の壺』に得るところが、多かった」と語っている。⁴ 確かに、ホフマンの『黄金の壺』では現実世界と非現実世界が交錯し、その中で主人公アンゼルスは、それらの調和を追求するのであるが、最終的には失敗に終わる。しかし主人公は、その試みによって真実を、すなわち「深い現実」を認識するのである。このように、『黄金の壺』では、主人公の獲得する新しい認識の原理が問題となっているが、他方『はてしない物語』では、これをもう一步進めて、「人格変成能力としてのファンタジー」が問題になっていると考えられるのである。⁵ この意味においてエンデ文学は、ドイツ・ロマン派における童話形式の伝統を継承していると言えるであろう。

『はてしない物語』⁶における主人公バスチアン・バルタザール・ブックスは、10歳か11歳くらいの背が低く、太って風采の上がらない少年である。そのうえ、スポーツも勉強も苦手で、気弱なため、学校ではからかわれたり、いじめられたりするので、彼にとって学校生活は、「はてしなく長い囚われの刑」(S. 13) としか思われぬ。それと同時に、彼にとって人生そのものが面白みがなく、灰色の人生となってしまっている。灰色の冷たいある11月の朝、いじめっ子に追われて本屋に逃げ込んだバスチアンは、赤がね色の表紙の『はてしない物語』という本に惹きつけられ、それを盗み出し、学校の物置に隠れてその本を読み始める。こうしてバスチアンは、ファンタジーエン国に入り、そこで数々の冒険を体験し、そこでの試練を乗り越えて、現実に帰ってくるのである。

ファンタジーエン国では、彼が自分の欲望を実現する度に、一つずつ記憶が失われていった。彼のすべての記憶が失われたならば、彼は現実に帰ることができなくなるのである。残った数少ない記憶を頼りに「霧の海」を渡り、あるがままの自分として愛されたいと願い、そして「変わる家」でアイウォーラおばさまに大事にされ、自分も「愛せるようになりたい」(S. 393-394) と思うよう

1 樋口純明(編)『ミヒャエル・エンデ——ファンタジー神話と現代』人智学出版社、1986年、67ページ。

2 拙論「ファンタジー文学に関する定義づけの試み」、『藝文研究』(柴田陽弘教授退任記念論文集)、第91号第2分冊(91-2)、2006年1、71-84ページ。

3 樋口純明、前掲書、29ページ。

4 同書、38ページ。

5 拙論「人格変成能力としてのファンタジー——ミヒャエル・エンデの『はてしない物語』における過去の記憶の再構成について」、『九州ドイツ文学』第15号、九州大学独文学会、2001年、1-10ページ参照。

6 エンデ、ミヒャエル『はてしない物語』上田真而子・佐藤真理子訳、岩波書店、1983年。Ende, Michael: *Die unendliche Geschichte*. Stuttgart (K. Thienemanns) 1979.

になる。ようようヨルのミンロウド鉱で、透明な氷のかたまりに閉じこめられた淋しい父親の絵を見出す。この父親の絵が、バスチアの過去の記憶の再構成⁷において重要な役割を果たすのである。そうして、ついにバスチアは、アトレユたちの助けを借りて、生命の泉にたどり着き、ファンタジーエン国で得たすべてのものを返して現実界に戻る。このようにバスチアは、ファンタジーエン国で経験する様々な冒険を通じて彼自身の欠点や弱点を克服し、内面的な成長を遂げることができるのである。この冒険によって今やバスチアは、人格の変成を成し遂げている。外見は、たいして変わらないが、しかし彼は、自分の存在の一回性を認識し、未来への希望に満たされている。彼は、決して虚無に捕われることはないのである。

2. 『はてしない物語』における同毒療法効果

文学の効用を問うとき、筆者は、ホラティウスの詩論に倣って、「教化と娯楽」(prodesse et delectare)と答えざるを得ない。ただし、ここにおける教化には、「不安を克服する智慧」を含めて理解されなければならない。まさしく不安は、キルケゴールが言うように、「死に至る病」である。この病こそ、人間の存在を深く蝕むものなのである。従って、この病を人間は、なんとかして治さなければならない。不安は、虚無をもたらし、人間の心に空洞を生ぜしめる。すると人間は、心的エネルギーを失い、操り人形のようにになってしまう。これを防ぐためには、対立から生まれる緊張を発見しなければならない。例えば、現実と非現実、鏡の表と裏、実数と虚数、プラスとマイナス、男と女、といった対立原理の緊張関係である。ここから森羅万象が生ずると考えられる。この関連において、物の世界においてばかりではなく、文学の分野においても、ちょうど文法の分野において直接法が現実の世界を表現し、接続法(仮定法)が非現実の世界を表現するように、外界と内界を調和的に統合しようとする文学が求められる。これがファンタジー文学である。従って、ファンタジー文学は、基本的には50%の現実と50%の非現実を含んだ文学形態であると見なすことができよう。端的に言う、「虚構という枠組みの中で、現実の内容(事実・出来事)と非現実の内容(神話・童話)を、半々に混入させた文学」と定義づけることができるのである。⁸

『はてしない物語』の主人公バスチア・バルタザール・ブックスが逃避するファンタジーエン国は、現実とは正反対の世界である。これら2つの世界は、ちょうど水と油のような関係にある。しかし、読書行為を通じて主人公は、本の中にある虚構の世界、すなわちファンタジーの世界を心の中の真実として取り入れてゆくのである。⁹つまり、物語に惹きつけられ感情移入が起こったとしても、それはエンデの目指す最終段階ではないのである。外界に存在する本の中に閉じ込められているファンタジーの世界を、自分の心の中に取り入れ、さらにはこれを認識として結晶化させ、自分の行動様式を創成し、これに基づいて自分のファンタジーを外界において実現しなければなら

7 拙著『悪魔の霊液——文学に見られる自己の分裂と統合』同社、1997年、211-222ページ参照。

8 <「ファンタジー文学」に関する定義づけの試み>、「藝文研究」(柴田陽弘教授退任記念論文集)、第91号第2分冊(91-2)、2006年12月1日、71-84ページ。

9 小林良孝「ミヒヤエル・エンデ著『はてしない物語』におけるはてしなさについて」、静岡大学人文学部人文学科研究報告「人文論集」第54号、2003年、209ページ参照。「エンデが自分の基本的創作法として『外界を内界に換えて描く』という時、彼が意図していたのは、おそらくはこういう意味においてではない。エンデが本当に意図していたことは、本の読み手であるバスチア自身が彼が読んでいる『はてしない物語』の中の登場人物としてその物語に入って行くということなのだ。」

ない。この意味において、本の中のファンタジーの世界を、読書行為を通じて自分の心の中に取り入れる「場面の接続」は注目に値する。物語の中では赤色の場面、つまりバスチアンのいる現実世界を描く場面は53、緑色の場面、すなわちファンタジー世界を描く場面は52ある。従って、その接続は104に上る。前述のように、一文の中に赤色と緑色が合わさっている場合もあれば、それぞれの独立した文のまとまりが交錯する場合もある。1つ1つの接続を分析していく過程で、接続には無機的接続と有機的接続の2つがあることが分かる。この2つの接続を医学の分野の療法と比較すると、無機的接続は、対症療法に、そして有機的接続は同毒療法に相応していると考えられるのである。

バスチアンは、ファンタジーエン国において、当初は自分の「真の望み」ではなく、欲望を実現しようとする。彼の欲望を掻き立てるのは、虚無の化身ザイーデである。このザイーデがバスチアンの欲望を利用して、彼を自分の支配下に置こうとする。しかしながら、このザイーデのマイナスの働きかけが、バスチアンの欲望に影響を与えて、彼本来の治癒力、すなわち「真の望み」を蘇らせるのである。数学的にマイナスにマイナスを掛けるとプラスとなるように、医療的にもプラスの効果が生ずるのである。これが、同種療法¹⁰とも呼ばれる同毒療法の根本原理である。もともと正常な人間の細胞組織が体内の調和を失い、病気になったとき、再び元の調和を取り戻すために、逆に病気の状態を引き起こす物質、つまり本来の健康時に摂取すると、その病気と同じ病状を引き起こす物質を取り入れる必要があるということの意味している。マイナスの状態に、さらにマイナスの状態を引き起こす刺激を与えると、人間の自然治癒力が飛躍的に活性化されるという訳である。

3. トラウマとリズム

歴史を通観すると、通説に異を唱え、異端として排斥された科学者も少なからず存在する。数例を挙げてみよう。まず、旧来の天動説に対抗して地動説を唱え、異端審問にかけられたガリレオ (Galileo Galilei, 1564-1642) の事例が挙げられる。また、動物磁気を提唱したメスマー (Franz Anton Mesmer, 1734-1815) は、一時盛大な歓迎を受けたことがあるものの、その理論はひどい誤解を蒙った。天然痘の予防法を発見し、人類の生存に多大の貢献をなしたジェンナー (Edward Jenner, 1749-1823) の接種も、当時の医学界からなかなか認知してもらえなかったのである。そして今日、200年ほど前にドイツのハーネマン (Samuel Hahnemann, 1755-1843) が提唱した同毒療法は、ヨーロッパではある程度認知されているとは言っても、日本の医学界においては一部でしか認められていない。

精神分析学の理論を構築したフロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) も、その性愛的な局面が強調されたために、当時の保守的なウィーンの名士たちからは排斥されたのであった。フロイトの、精神分析学的理論の童話解釈との関連における重要な視点は、フロイトがその「W・イェンゼンの小説『グラディーヴァ』にみられる妄想と夢」(1909年) という論文において指摘する「心的障害がその源泉に引き戻されれば、それと併行してその障害は消滅する、すなわち分析が同時にまた治癒

10 拙論「無意識の宝——『金の毛が三本ある悪魔』(KHM 29)の深層心理学的解釈」,「鹿児島大学法文学部紀要人文科学論集」第76号, 2012年, [35-51] 35-36ページ参照。

の役目を果たすのである」(84ページ)¹¹ というテーゼであると考えられる。この神経症患者に関する治療の手法の根本は、一見意外な印象を与えるかも知れないが、メスマーまで遡ることになる。¹² 当時、ペテン師か魔術師として見なされがちであったメスマーが、その実証と理論化には程遠かったにせよ、啓蒙主義の時代にすでにフロイトにまで続く催眠効果を発見していたのであった。メスマーによって一躍世界的脚光を浴びることとなった力動精神医学の思想は、その後ピュイセギュール侯爵 (Marquis de Puységur, Armand-Marie-Jacques de Chastenet, 1751-1825) やナンシー学派のリエポー (Auguste Ambroise Liébeault, 1823-1904) とベルネーム (Hippolyte Bernheim, 1837-1919)、そしてサルペトリエール学派のシャルコー (Jean-Martin Charcot, 1825-1893) 等を経て、フロイトやユングへと受け継がれてゆくことになる。¹³ このように、人格の分裂や多重人格の症例が公に報告されるようになるのは、18世紀後半頃からであり、それ以降症例報告の数は徐々に増えてくるのである。

フロイトが明確に理論化した治療の手法に関して言えば、基本的にはすでにメスマーにあってその原型は把握されていたと考えることができる。それを裏づけるものは、ウィーンで有名な商人、オイゲン・コルシツキーの失明を治した症例である。オイゲンは、ウィーン一の菓子製造者であった。彼は、貴族にもブルジョワにも大事にされる善良な人物であったので、フリーメーソンの「真実と団結」支部長ラルグス・フォン・バルアーに入会を勧められても、これを断りはしなかった。周知のように、フリーメーソンの入会に当たっては、火と水と風による「三つの試練」が課せられる。人の善いオイゲンは、なんら心の準備をしていなかったと思われる。そのため彼は、この試練の直後、失明するのである。その経過は、次のように描写されている。

オイゲンはわなわな震え出した。にわかに息がつまり、水に溺れ、火に焼かれる悪夢に襲われたのだ。分厚い目隠しに締めつけられた頭に激痛が走る。布をずらそうともがくと臉はさらに締めつけられて、圧迫された眼の中に閃光が走った。試練のしょっぱなから肝をつぶし、血も凍りつくような恐怖に身動きもできなかった。彼は生きた心地もなく汗を滲ませ震えていたが、このぼろ布同然になった男を三人の同志はなおも「三つの試練」に引きずり回し、

11 拙著「童話を読み解く」同学社、1999年、84ページ参照。<プロイヤーが浄化的 *kathartisch* と名づけ、筆者が好んで「精神分析的」*psychoanalytisch* と呼んでいるこの治療法の根本は、無意識的なものの抑圧が病因でハーノルトの妄想と同じような障害にかかっている患者の当の無意識的なものを、ある程度無理に意識に昇らせるという点にあり、これはグラディーヴァが、幼児の自分たちの関係についてハーノルトの内部で抑圧されている記憶にたいして行なった方法と完全に一致している。><作家は彼のツォーエに、幼なじみの友の妄想治療にまっしぐらにおもむかせる。だがその治療法には、J. プロイヤー博士と著者(わたし)が1895年に医学に導入し、以後その完成に著者が専念してきた治療方法とかなり似通っている面がある。というよりは本質的に完全に一致している。プロイヤーはこの治療法を当初「カタルシス」と読んでいたが、著者としてはむしろ「精神分析」療法と名づけたい。ハーノルトの妄想と類似の精神障害を病んでいる患者たちの場合には、この治療法の眼目は、グラディーヴァが幼なじみ関係への抑圧された記憶を相手どってしたのとまったく同様に、抑圧のもとに患者たちが病んでいる無意識をいわば無理やり意識させてやることにある> (W. イェンゼン/S. フロイト『グラディーヴァ/妄想と夢』種村季弘訳、作品社、1996年、220-221ページ)。Vgl. Freud, Sigmund: Sigmund Freud: Studienausgabe. Bd. X, *Bildende Kunst und Literatur*. Frankfurt/M. (Fischer Taschenbuch) 1982, *Der Wahn und die Träume* in W. Jensens *Gravdiva*. S.79, „Das Verfahren, welches der Dichter sine Zoë zur Heilung des Wahnes bei ihrem Jugendfreunde einschlagen läßt, zeigt eine weitgehende Ähnlichkeit, nein, eine volle Übereinstimmung im Wesen, mit einer therapeutischen Methode, welche Dr. J. Breuer und der Verfasser im Jahre 1895 in die Medizin eingeführt haben und deren Vervollkommnung sich der letztere seitdem gewidmet hat. Diese Behandlungsweise, von Breuer zuerst die »kathartische« genannt, vom Verfasser mit Vorliebe als »psychoanalytische« bezeichnet, besteht darin, daß man bei den Kranken, die an analogen Störungen wie der Wahn Hanolds leiden, das (S. 80) Unbewußte, unter dessen Verdrängung sie erkrankt sind, gewissermaßen gewaltsam zum Bewußtsein bringt, ganz so wie es die Gradviva mit den verdrängten Erinnerungen an ihre Kinderbeziehungen tut. ...“

12 プラネリ、ヴィンセント『ウィーンから来た魔術師』井村宏次・中村薫子訳、春秋社、1992年、307-326ページ参照。

13 エレンベルガー、アンリ『無意識の発見 上・下』木村敏・中井久夫監訳、弘文堂、1980年、上61-118ページ参照。

無理やり《苦難》に耐えさせるのだ。試練はすべて死のような静寂の中で行われ、オイゲンも文字通り生きた心地がしなかった。最後にやっと「榮譽の間」に連れていかれたが、足の力が抜けて入会の誓いをたてようにも体を支えきれない。その上暗記した言葉も忘れてしまっていて、まわりから囁いたり、代唱してやらねばならなかった。それもすむと、ラルグス・フォン・バルアー支部長を囲む^{ママ}同士全員がいっせいに剣を抜き、切っ先をオイゲンの額に突きつけた。[.....] オイゲンは眼が眩み、手で眼を覆いながらどうと倒れ込んだ。熾烈な儀式に新参加者が失神してしまうのはよくあることなので、誰もうろたえはしない。ソファーの上に寝かせて、気つけ薬を飲ませ、そのあいだ同志たちは音楽を奏で彼の入会を祝った。ところがオイゲンはいつまでも暗然たる面持ちで押し黙っている。やがて、虚ろな目で部屋を見回しながら彼は明りを求めた。立ち上がろうとしたものの、またへたり込んでしまうので、みな心配しはじめた。彼は相変わらず明かりをくれという。やっと誰もが理解した。オイゲンの眼は見えなくなってしまうのだ。¹⁴

オイゲンの失明は、明らかに器質的なものではなく、「三つの試練」による心因性のショックからくるものである。彼の失明を治すために、眼科の専門医であり、白内障の外科手術もできるバルト教授が治療に当たる。しかし、教授の処方する「カミツレ薬草風呂入浴」や「タチアオイ薬草風呂入浴」は効を奏しなかった。オイゲンを失明させた張本人のラルグス・フォン・バルアー支部長は、悩んだ末に、フリーメーソンの「善行」支部長ツィトルス・ヤーヌス・フォン・エレンベルクに相談し、最終的には医者としての評判が高いメスマーにオイゲンの治療を頼んだのであった。メスマーの治療は、基本的にはフロイトの手法と同種のもので、病を引き起こしたその原点(トラウマ)に遡るといえるものである。この経緯を『眠りの魔術師メスマー』の著者であるチュイリエは、次のように要約している。

オイゲンの治療は、ゾボティッシュのユダヤ人青年の場合に劣らず、メスマーに自分の治療法の効力をいやが上にも思い知らすことになった。患者への質問を通じて、患者自身に障害の発生経緯を再構成させると、当人はその経緯を話しながら不安や発作を再体験することになるのだが、この再体験された発作が治療のきっかけとなるのだ。[傍点は筆者] この二症例からメスマーは次のことも確かめた。通手によって伝えられたメスマーの流体は相手の心身に浸透するが、その際催眠術がかけてあれば、その催眠状態を長引かせたり打ち切ったりして、相手の患者を自分の意志通りに操ることができるのだ。

このように患者の精神に作用を及ぼすことによってメスマーは患者を治していたわけだが、彼はこの作用を動物磁気療法という名のもとに具体化することに固執した。自分の持つ力に超自然力とか天啓とかを持ち込みたくはなかったからだ。自分の医学は、今みずから規範を打ち立てようとしている動物磁気療法においてこそ晴れて真の医学たりうるのだ。(チュイ

14 チュイリエ、ジャン『眠りの魔術師メスマー』高橋純・高橋百代訳、工作舎、1992年、162-163ページ。以下、この文献からの引用は、「チュイリエ」と略記し、本文引用末尾にページ数を付す。

リエ170ページ)

フロイトから遡ること150年ほども前の1760年代において、すでにメスマーが精神分析の手法を発見していたという事実は、驚くべきことである。¹⁵ この手順は、フロイトの精神分析的療法における手順と似ている。筆者は、拙著『悪魔の霊液』において、C. H. セグペンとH. M. クレックレーの『私という他人』におけるイヴ・ホワイトの症例を詳細に分析し、彼女が人格の分裂を体験したが、幸いにも最終的には人格の統合を成し遂げたその経過を次のように要約した。

こうした幼児期の隠された記憶を取り戻すことによってホワイトは、心の傷の本来の原因が、父親との接触の欠如と、無意識の抑圧によって生じた双生児の妹に対する嫉妬にあることに思い当たる。この最も古い心の傷の原因を理解して初めて、その傷は癒され、これと同時にホワイトとブラックを分け隔てていた閉塞物が融解されて、再び心的エネルギーが正常に循環し始めるのである。こうして最終的には、安定的統合人格であるエヴリンが出現したのであった。¹⁶

ここにおいて「感情のしこり（ブロッケード）」を「心的障害」と把握し、「心的障害をその源泉に引き戻す」ことを「波動調整」（ハーモナイズ）と把握すると、まさしくこの着想は、現代ドイツで提唱されている「振動医学」の考えと呼応するのである。

4. 振動医学

日本においてドイツの振動医学を紹介しているのはドイツ人ヴィンフリート・ジモンであり、また彼の友人野呂瀬民知雄である。野呂瀬は、その著書『ドイツ振動医学が生んだ新しい波動健康法』において、「西洋医学が長らく見落としてきたもの、つまり人間の自然治癒力を最も確実に引き出す方法を、私たちはようやく手に入れたのです。それが、振動医学のバイオレゾナンス・メソッドです」¹⁷ と述べている。またジモンは、その著書『最新ドイツ波動健康法』において、「振動医学で可能なこと」¹⁸ として、1. エネルジェティックなブロッケードの有無を調べること、2. そ

15 ダーントン、ロバート『パリのメスマー——大革命と動物磁気催眠術』稲生永訳、平凡社、1987年。この原著は1968年に出版されているが、ここでダーントンは、通常「ペテン師ないし魔術師」としてのみ、否定的に評価されがちなメスマーを公平に評価しようと努めている。「本研究はメスマーを正当な地位、つまり、この時代にもっとも話題をよんだ人間の万神殿（パステオン）において、チェルギー、フランクリン、カリオストロに近いどこかに復帰させることになろう。」（4ページ）他方、1978年にその原著が出版されているタートルは、ハーヴァード大学のドイツ文学研究者であるが、メスマーを旧態依然として「ペテン師」として把握している（マリア・M・タートル『魔の眼に魅されて』鈴木晶訳、国書刊行会、1994年、7-70ページ参照）。ただしタートルは、その後のプロイアーによる「談話療法」によるトラウマの治療法は正しく理解して、次のように述べている。「プロイアーは、彼女〔アンナ・O；筆者〕の症候の一つ一つは父親が病気で床に伏していた頃に起きた個々の出来事まで遡ってゆけること、そして症候の最初の発現を導いた出来事を患者が思い出し、それについて語ったとたんに症候は消えること、を発見した」（同書、57-58ページ）。メスマリズムとホメオパシーの創始者ザームエル・ハーネマンとその信奉者たちとの関係については、次の論文を参照のこと。Vgl. Wittern, Renate: Zum Verhältnis von Homöopathie und Mesmerismus. In: Schott, Heinz: *Franz Anton Mesmer und die Geschichte des Mesmerismus*. Stuttgart (Franz Steiner) 1985, S. 108-115.

16 拙著『悪魔の霊液——文学に見られる自己の分裂と統合』同学社、1997年、229-230ページ。以下、この文献からの引用は、「悪魔の霊液」と略記し、本文引用末尾にページ数を付す。

17 野呂瀬民知雄『ドイツ振動医学が生んだ新しい波動健康法』現代書林、2003年、15ページ。以下、この文献からの引用は、「野呂瀬」と略記し、本文引用末尾にページ数を付す。

18 ジモン、ヴィンフリート『最新ドイツ波動健康法』現代書林、2003年、140ページ。以下、この文献からの引用は、「ジモン」と略記し、本文引用末尾にページ数を付す。Vgl. Schmidt, Paul: *Symphonie der Lebenskräfte*., Lennestadt (Saalhausen) [RAYONEX Wellentechnik GmbH] 1986.

のブロックを解消すること, 3. ブロックをつくった原因を明らかにし, 原因を除去すること, 4. 生命エネルギーの流れをより健全なものにすること (ジモン140ページ), という4点を列挙している。

エネルギー的なブロックを波動調整することによって健康な状態が回復されるという事実を踏まえると, イヴ・ホワイトとイヴ・ブラックとでは脳波の違いが見られたという結果は, 振動医学における波動調整の信憑性を示唆するものと考えられる。つまり, そこでは「脳波記録機によって心身の平静を示すアルファ波を測定すると, ホワイトとジェーンが同じ毎秒10½サイクルを示すのに反して, ブラックは正常の上限である12½サイクルを示した」(悪魔の霊液212ページ)という事実が指摘されているのである。この事実を考慮に入れると, 病んだ人格に健全な人格のもつ波動を与えてハーモナイズすれば, 健全な人間に復帰する可能性が想定されるのである。振動医学を提唱したパウル・シュミットは, 「肉体 (ボディ) よりも, エネルギーボディのほうが先に病む」(ジモン72ページ)というテーゼを提出している。このテーゼは, 人間の心ないし心的エネルギー, ひいては生命力に照明を当てた精神分析学の手法と共通点を持っている。この関連において, 「ウロボロス」というシンボルは, 深層心理学において「永遠の時間と原初の混沌をあらわすもの」という重要な意味を持っている。同様に, 象徴学的に見ても, 蛇は「原初の宇宙の力・無意識・生命力・治癒力・再生」を意味している (悪魔の霊液217ページ)。

5. 水の記憶

動物磁気と精神分析学, 振動医学は, 不可思議にもその核心において共通点を有し, 1つの合流点を形成している。しかも, そこにはさらに同毒療法 of の考えも流入しているのである。万物の存在の最も本質的な基盤が振動であるという振動医学の根本思想と「水の記憶 (波動ないし磁場)」に基づく同毒療法には, 確かな共通点が見出される。

この事実を踏まえると, レメディにあって現物質は, ほとんど意味を持たないと考えられる。¹⁹むしろ, 原物質のもつ「振動ないし波動」が水に転写されるのだと解釈せざるを得ない。フランスの科学者ジャック・ベンベニスト (Jacques Benveniste, 1935-2004) 博士は, イギリス科学誌『ネイチャー』に「高希釈液の活性」に関する論文を掲載したが, 遺憾ながら, それによる彼への攻撃は, 彼の言葉によると, 「魔女狩り以上のもので, およそ科学者とは無縁の態度であった」と言われる。²⁰ベンベニスト博士は, フランスにおいて財政的支援を受けられず, 不遇な晩年を迎えたのであった。

「水の記憶」という不可思議な現象も, しかしながら現在では, 野呂瀬が「ルルドの泉」を「波動水」によって説明しているように, 以前ほど謎めいた現象ではなくなっている (野呂瀬164-165ページ)。水にこのような機能が果たして本当にあるのかどうか, 疑問に思う人もいるかも知れない。しかし, 水には人間の感情を記憶する性質があることを示す事例は存在している。『パウル・シュミット式バイオレゾナンス』を著したディートマー・ハイメスによると, 「あなたは不細工だ。気分が悪く

19 レメディ:マザーチンキを一滴取り, 99倍の溶液(蒸留水+アルコール)に入れ, 44回振盪する。これで, 100倍の希釈となるが, これを10回, 20回と繰り返す。最後には, 原物質がほとんど無くなるまでに希釈される。しかし, 原物質にはポテンシー (原物質のリズムないし磁力) は, 逆に強化されると言われる。

20 ベンベニスト, ジャック『真実の告白——水の記憶事件』フランソワ・コート編, 由井寅子:日本語版監修, 堀一美・小幡すぎ子共訳, ホームオパシー出版, 2006年, 4ページ。

なる」と話しかけられた水は、凍らせると歪んで不規則な結晶を形成するが、これに反して、「愛しているよ。君はきれいだ」と話しかけられた水は、凍らせると美しく規則的な結晶を形成すると言われる。²¹

リズム、あるいは波動（振動）は、自然界ないし宇宙を支配している。野呂瀬にせよ、またジモンにせよ、彼らの振動医学の根本原理は、量子物理学の基礎を築き、ノーベル物理学賞を受賞したドイツの物理学者マックス・プランク（Max Karl Ernst Ludwig Planck, 1858-1947）のテーゼ「すべては振動であり、その影響である。現実には何の物質も存在しない。すべてのものは、振動から構成されている」に基づいている（ジモン51ページ）。このテーゼの核心は、仏教の『般若心経』で説かれる「色即是空、空即是色」の教えにも通底している。つまり、明確に現象として表れるものと空と見えるものは、その振動数の違いによるものでしかない。換言すると、密度の高いものは現象として把握され、密度の低いものは空のように見えるが、しかし、いずれの場合にも振動は現在しているのである。

6. 生命のリズムと電磁波

生きている人間には生命があり、生命ある物はすべてリズムを持っている。それは、心臓の鼓動であり、脳波でもある。生命ある物に通底しているリズムは、同時に振動でもある。「太鼓」は、最初の楽器であり、その鼓動は、母親の胎内の鼓動、心臓の鼓動にその起源を持っていると言われる。²² この意味で太鼓は、母なる大地の鼓動ばかりではなく、全宇宙の鼓動をも象徴的に示している。この鼓動もそうであるが、一般にリズムというものは、1つのサイクルを内包している。このサイクルは、電流のサイクルと同様、生命においても、微弱な電流の力によって生じている。思うに、人間の身体の細胞における様々な生成変化も化学的反応に基づいている。そして、この化学反応をもたらすものは、微弱な電氣的刺激に他ならない。この関連において、ドイツ振動医学の提唱者であるヴァインフリート・ジモンは、次のように述べている。

じつは私たちの体も、ある意味では「生きた精密機器」であり、飛行機や病院の機器よりはるかに精巧です。しかもすべての細胞は電気を帯びています。通常は細胞の外と内ではマイナス70mV前後の電位差があり、何かの刺激があるとマイナスがプラスに逆転します。筋肉や神経が情報伝達に利用しているのはこの電位差です。²³

この生命の電流は、極めて微弱なものである。従って、植物にしても動物にしても、それほど他の生命に深刻な影響は与えない。むしろ、健康な生命のリズムは、弱った生命と同調して、その弱った生命体のリズムを調和させ、健康にすることも可能である。自然における万物は、気の遠くなるような長い年月の中で、それぞれ独自のリズムを互いに中和し、それによって調和を生み出してきたと考えられる。従って、自然の中の個体は、独自のリズムを発しながらも、他の個体にそれほど

21 Vgl. Heimes, Dietmar: *Bioresonanz nach Paul Schmidt*. Baunach (Spurbuch) 2006, S. 95.

22 Vgl. Drewermann, Eugen: *Brüderchen und Schwesterchen*. Olten und Freiburg im Breisgau (Walter) 1992, S. 23.

23 ジモン, ヴァインフリート『ドイツ発「気と波動」健康法』イースト・プレス, 2012年, 175ページ。

悪い影響を与える可能性は低い。²⁴ しかしながら、現代社会に溢れている電気器具から発生する電磁波は、それが短時間で作られ、人工的なものであるがゆえに、また強力であるがゆえに、逆に人間のリズムを狂わす場合が多いと言わざるを得ない。現代社会に氾濫しているとも言える電磁波は、心臓の鼓動にも、脳波にも悪影響を及ぼす可能性が大である。脳波・鼓動を狂わせるとすれば、最終的にそれは、人格にも悪影響を及ぼすであろう。さらにジモンは、近代建築に用いられる新建材や接着剤、防虫剤、防腐剤等も人間に悪影響を及ぼしていることを、次のように指摘している。

たとえば、「シックハウス症候群」と呼ばれる体の不調。壁紙などの接着剤に含まれる有機溶剤（ホルムアルデヒドなど）や、木材保護のために用いられる防虫剤・防腐剤の揮発性有機化合物（VOC）は、そこに住む人にめまいや頭痛、喉の痛み、湿疹、呼吸器疾患など数多くの健康障害を引き起こすことが知られています。²⁵

筆者は、接着剤・防虫剤・防腐剤の含む揮発性有機化合物に詳しい知識を有する者ではないが、しかし、この揮発性有機化合物も、突き詰めて考えると、「有害な振動を出す物質」であると把握できるように思われる。私たち人間が波動の中で生きているという認識を持つのは、単に波動医学を信奉する研究者のみではない。スピリチュアル・カウンセラーであるベニー・ピアスは、人間の感情ですら、様々な波動に影響されていることを指摘している。²⁶ 万物の根源を振動に帰することが可能であるとすれば、その振動には、「調和した善い振動」と「不調和な悪い振動」があると考えられる。そう考えると善とは調和ある振動のことであり、悪とは不調和な振動であるという結論が得られる。

7. 『はてしない物語』における振動医学的效果

一回性の存在を保持する人間は、肉体と精神から成っている。人間にとって肉体的苦痛の方が直接的で耐え難いように思われるが、しかし、実は精神（心）の方がいっそう傷つきやすいのである。この関連において、振動医学を提唱したパウル・シュミットの、「肉体（ボディ）よりも、エネルギーボディのほうが先に病む」（ジモン72ページ）というテーゼは、人間の心ないし心的エネルギーに照明を当てた精神分析学的手法と共通点を持っている。精神分析理論を適用した症例においては往々にして発見される事実であるが、2つの人格、換言すると、ペルソナとシャドウ、現実世界におけるバスチアンとファンタージェンにおけるバスチアン、ジキル博士とハイド氏といった対立した人格が統合される時、ウロボロスのイメージが浮上してくるのである。そこでは、対立するエネルギー（振動ないし波動）が合流していることが分かる。ウロボロスのイメージは、精神分析による人格の統合の際にも現れる。

24 ただし、「大地の発するマイナス波動が私たちの体に及ぼす負担」があるとされる（同書、194ページ）。これは、「ジオバシックスストレス」と呼ばれ、この原因には「1. 地下水脈の波動、2. 地下の断層、亀裂、洞窟が発する波動、3. 地磁気の放射帯」の3つある（同書、194-195ページ参照）。

25 同書、168-169ページ。

26 ピアース、ベニー『人生を変える波動の法則』PHP研究所、2010年、58-88ページ参照。

虚栄を張るためにバスチアンは、権力をもつ帝王になろうと欲したのであった。また、虚弱な心を克服しようと、強力な勇者になろうと欲したのである。最後にバスチアンは、その過ちに気づくのである。これらの経験は、虚栄と虚弱というレメディとして同毒療法効果を発揮する。虚栄と虚弱をある程度克服した段階でバスチアンは、彼の冒険における最大の難関である虚無と対決する。虚無は不安と同様、人間の存在を根底から蝕む要因である。現実世界において「ちびで、でぶで、意気地なし」という欠点を持ち合わせていた現存在をバスチアンが認知し、肯定するのに大きな効用をもっていたのが、虚無の化身であるザイーデである。物語の中では、この否定的な人物であるザイーデが、実はレメディとして働き、バスチアンに虚無を克服するだけのバイタルフォース²⁷を喚起したのであった。こうしてバスチアンは、ファンタジーエン国において、虚無・虚栄・虚弱に対するレメディを摂取し、これらの弱点を克服したと結論づけられるのである。

M. Ende: „Die unendliche Geschichte“

– Über den Einfluss der homöopathischen Effekte und der Schwingungstechnik auf die Geschichte –

Yukinobu UMENAI

Das Werk „Die unendliche Geschichte“ (1979), das nach dem 2. Weltkrieg den größten Erfolg gewann, steht in der dichterischen Tradition des Märchens der romantischen Schule. Die Hauptperson Bastian ist ein Junge, der sich schwer an die reale Welt anpassen kann. Ihm ist das Schulleben unerträglich. Eines Tages wird er von seinen bösen Schulkameraden drangsaliert, flieht in eine Buchhandlung und wird dort von einem Buch namens „Die unendliche Geschichte“ fasziniert. Das Buch stiehlt er und liest es in der Rumpelkammer der Schule. Er gerät dadurch in das Reich Phantasien, erfährt dort zahlreiche Abenteuer, überwindet verschiedene Proben und kehrt wieder in die Welt der Wirklichkeit zurück. Die Metamorphose des Charakters der Hauptperson kann vom Einfluss homöopathischer Effekte und der Schwingungstechnik auf das Werk gut erklärt werden.

Die Hauptperson Bastian leidet unter einem krankhaften Mangel an Anpassungsfähigkeit. Es besteht die Gefahr bald auch unter dem Krankheitszustand des Nichtsseins zu leiden. Dieser Krankheitszustand muss möglichst schnell geheilt werden. Zur Heilung gibt es auf dem medizinischen Gebiet zwei Methoden: Allopathie und Homöopathie. Heutzutage ist die Allopathie führend. Aber in der griechischen Antike erkannte der Gründer der Medizin Hippocrates (BC. 460-377) die Grundlehre der Homöopathie, indem er die natürliche Heilungskraft des Menschen betonte. Später entdeckte der Gründer der Homöopathie

²⁷ レメディを摂取することによって、摂取者のバイタルフォースに信号が送られ、「あなたは、今病気（マラリア、結核、癌、鬱、怒り、嫉妬など）ですよ」、ということを感じさせられると同時に、自己治癒力が活性化させられると言われる。

Samuel Hahnemann (1755-1848) die Lehre der Homöopathie wieder und behandelte wirklich damit seine Patienten. Jetzt wird die homöopathische Behandlung verbessert und mit verschiedenen Remedys verfahren. Die Basis der Homöopathie besteht darin, durch das Einnehmen eines bestimmten Remedys der natürlichen Heilungskraft des Patienten ein Signal zu geben, dass er jetzt krank sei, und ihn damit seinen Krankheitszustand unbewusst spüren zu lassen, schließlich seine Heilungskraft zu stärken und sie gleichzeitig zu vergrößern.

Im Punkt Heilungskraft des Unbewussten hängt die Homöopathie mit S. Freud (1856-1919) zusammen. Ein wichtiger Punkt seiner psychoanalytischen Lehre ist die These, dass „man bei den Kranken, [...] das Unbewußte, unter dessen Verdrängung sie erkrankt sind, gewissermaßen gewaltsam zum Bewußtsein bringt“. Mit dieser psychoanalytischen Methode, das Unbewußte ins Bewußtsein zu bringen, analysierten C. H. Thigpen und H. M. Cleckley den Krankheitszustand von Eve White genau. Während des Behandlungsprozesses, bei dem sie zuerst eine Spaltung ihrer Persönlichkeit erlebte und schließlich die Wiedervereinigung der Persönlichkeit vollbrachte, wurde klar, dass der stabile vereinigte Charakter, Evelyn am Ende dadurch ermöglicht wurde, dass die Gefühlsblockade (Steifheit), die White von Black unterschied, verschmolzen wurde und damit die psychische Energie wieder einen gesunden Kreislauf finden konnte. Wenn man hier die „Gefühlsblockade“ als „psychische Hemmung“ und „das Unbewußte zum Bewußtsein zu bringen“ als „Harmonisierung oder Welle anzuordnen“ auffasst, entspricht dieser Einfall genau dem Gedanken der „Schwingungstechnik“ von Paul Schmidt, die z. Z. in Deutschland aufgestellt wird. Es gibt eine gewisse Gemeinsamkeit zwischen dem Grundgedanken der Schwingungstechnik, dass das wesentlichste Fundament aller Dinge Schwingung oder Welle sei, und der Homöopathie aufgrund von Remedys oder der „Gedächtniskraft des Wassers“. Auch die Wunderkraft des „Wasser zu Lourdes“ kann jetzt als eine Art Schwingungswasser erklärt werden. Wenn man also die Ansichten von Homöopathie und Schwingungstechnik berücksichtigt, muss hervorgehoben werden, dass die negative Rivalin Xayide in der Tat als ein gewisses Remedy gegen das Nichts wirkt und in Bastian die Heilungskraft, das Nichts zu überwinden, erweckt wird.

